

浴室における小児の安全について

(分担研究：小児の事故とその予防に関する研究)

衛藤 隆*

要約： 幼児の浴室における事故防止のための保健指導内容を検討するに当たり、入浴習慣についての地域差を検討した。沖縄では浴槽に湯を張ってつかるといった習慣はないが、鹿児島、新潟では認められた。沖縄での浴室内事故はむしろやけどであった。地域の生活習慣を考慮した小児の事故防止のための保健指導案を作成することが望まれる。

見出し語： 小児、事故、防止対策、浴室、保健指導

【目的】

浴室における幼児の溺水事故防止のための保健指導の内容を検討する際には、対象者の居住する地域の生活習慣等の特性も考慮する必要がある。今年度は、このような観点より、わが国における入浴習慣についての地域差を知ることが目的とした。

【方法】

浴室における子どもの安全に関する自記式調査票を作成し、幼児の健康診査を受けに来た保護者を対象とし、調査を依頼した。調査票は健診会場にて回収した。主な調査内容は、浴室の有無、浴室での危険な体験、浴室侵入防止対策、浴槽の高さ、浴槽のふたの強度、入浴の仕方(浴槽に湯を張るかどうか)、残し湯である。調査実施地区および対象とした幼児の年齢は次の通りである。

沖縄県：宮古保健所(3歳児)、八重山保健所(3歳児)、平良市(1歳6ヵ月児)、石垣市(1歳6ヵ月児)
鹿児島県：加世田、出水、加治木、名瀬、

名瀬、鹿屋の各保健所で、対象児はいずれも3歳児

新潟県：湯沢町、塩沢町、六日町、大和町の1歳6ヵ月児、2歳児、3歳児

これらの各地域から集められた調査票のうち、有効回答計553件を分析の対象とした。有効回答の地域別内訳は沖縄県158件、鹿児島県204件、新潟県191件である。

【結果】

「浴室で子どもが危険な目にあったことがあるか」という問いに対しては、沖縄で16.6%(26/158)、鹿児島で16.3%(33/204)、新潟で27.9%(53/191)が「ある」と答えていた。(図1) 1歳6ヵ月と3歳を比較すると、沖縄県の1歳6ヵ月児で「危険な目にあったことがある」と回答したものは18.7%(14/75)、同じく3歳児で14.5%(12/83)であった。

「浴室に子どもがひとりで立ち入らないような工夫」については、いずれの地域においても80%以上は「特にしていない」という回答であった。

(図2) 年齢による比較では、沖縄県の1歳6ヵ月児で「特にしていない」は

* 国立公衆衛生院母子保健学部(Department of Maternal and Child Health, the Institute of Public Health)

65.3%(49/75)で、3歳児の84.3%(70/83)よりかなり低下していた。1歳6ヵ月児での工夫内容は「浴室の戸に鍵をかける」16%(12/75, 75%)、「障害物で浴室の入口を塞ぐ」6.7%(5/75%)等であった。

浴室の床から浴槽の上端までの高さについては、全体では「ひざの位置より高い」とする回答が約半数を占めるが、1歳6ヵ月児でみると、「ひざの位置より高い」のは沖縄で25.3%(19/75)、新潟で34.4%(31/90)であった。(図3)

浴槽のふたについては、鹿児島県、新潟県においては「硬くしっかりしている」という回答が各々67.4%, 58.7%であった。(図4) 沖縄では浴槽のふたを用意していない場合も結構あり、回答パターンが他の2件とはかなり異なっていた。

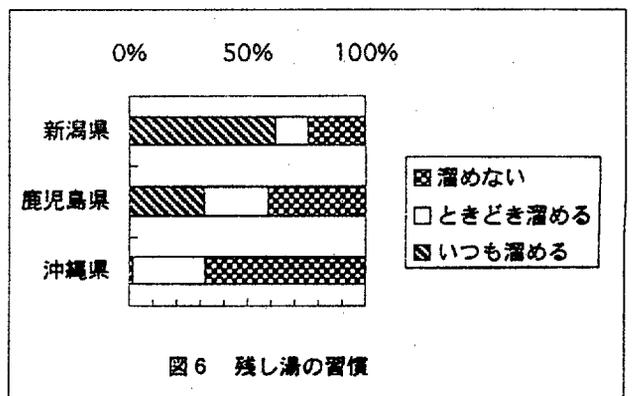
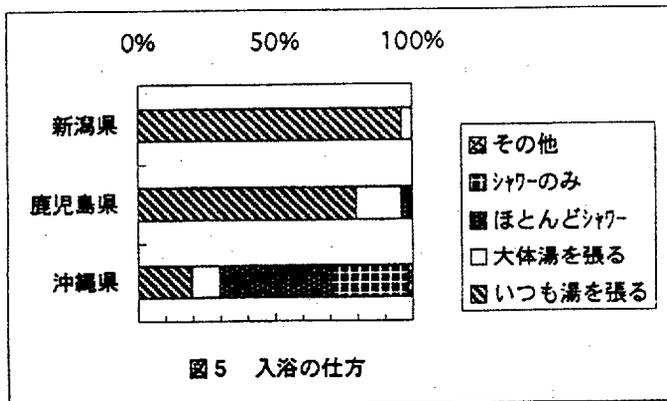
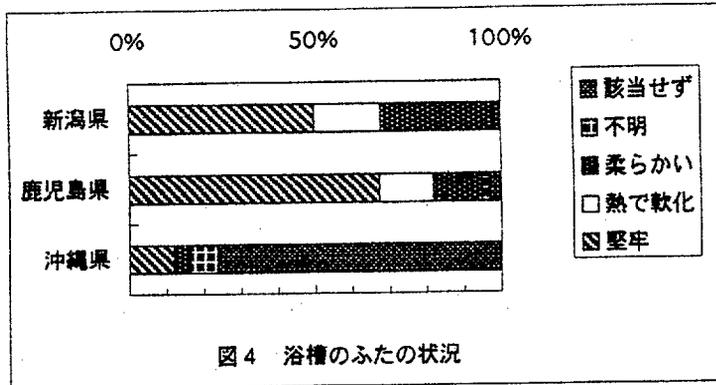
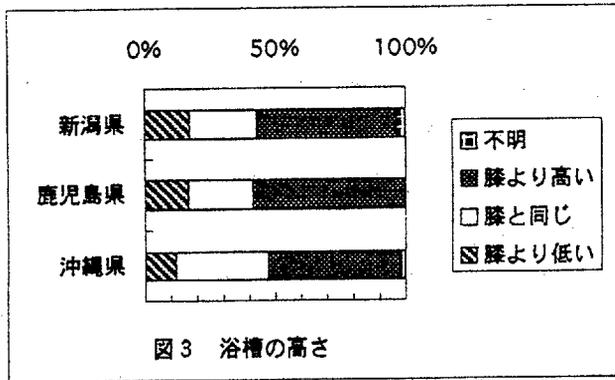
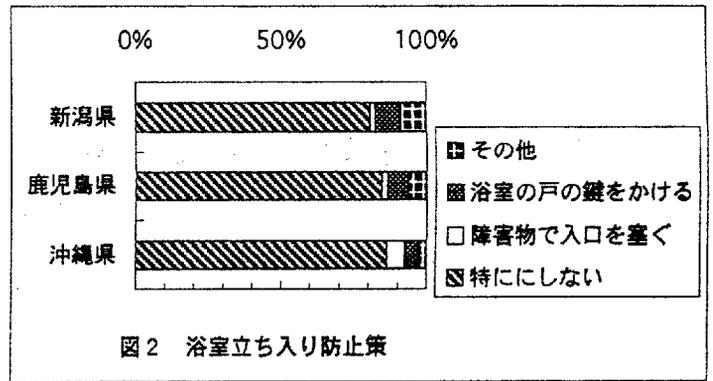
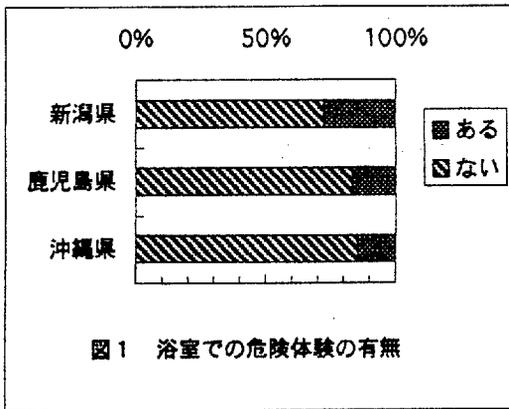
浴槽に湯を張って入る習慣については、地域差が顕著に認められた。沖縄県においては「いつも浴槽に湯を張る」が14.6%(20/158)、「大体湯を張るが、時にシャワーで済ます」が16.1%(22/158)であった。これに対し、鹿児島県では79.6%(160/204)が、また新潟県では92.5%(173/191)が「いつも浴槽に湯を張る」と答えていた。(図5)

また、残し湯の有無については、「いつも溜める」が沖縄県では0.93%(1/158)、鹿児島県では31.8%(64/117)、新潟県では56.4%(108/191)という結果が得られている。(図6)

【考察】

わが国の小児の不慮の事故死亡の中で、特に幼児においては家庭内の浴室における事故が多いことはよく知られている。このため、従来より、浴室内事故の防止のための保健指導として「浴室に鍵を付ける」、「残し湯をしない」が強調されて来た。これらはいずれも入浴習慣の変更を期待する内容を含んでいる。しかし、入浴習慣は、気候の差などの影響で地理的にかなり変化することが予想される。特に南の地方では、入浴して暖まる必要がないので、浴槽の使い方等にも特徴があるかもしれない。事故防止のためのきめ細かな保健指導を実施する際には入浴習慣を始め、地域の実生活特性を十分に把握しておくことが大切である。今回の調査結果より、沖縄においては浴槽に湯を張ってつかるという習慣は認められず、したがって残し湯も極めて稀なことである。風呂場での事故も溺れではなくむしろ熱傷が時々観察されるようである。

小児の事故防止について保健指導を行う場合には、地域の生活習慣を考慮に入れた内容で指導を行うことが大切であると思われた。





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約：幼児の浴室における事故防止のための保健指導内容を検討するに当たり、入浴習慣についての地域差を検討した。沖縄では浴槽に湯を張ってつかるという習慣はないが、鹿児島、新潟では認められた。沖縄での浴室内事故はむしろやけどであった。地域の生活習慣を考慮した小児の事故防止のための保健指導案を作成することが望まれる。